

# 絵図からみた城下町米子の空間構造の変化

## 2 回生 若槻穂波

### I. はじめに

米子は伯耆国支配の拠点として、古くから商業の盛んな地域であった。その背景には、中海に面し、港町として船の出入りがあったことや、出雲街道や伯耆街道が通る陸上の交通拠点であったことが考えられる。伯耆国の中心となった米子城については、現在も城跡の発掘調査が行われており、城郭や城下町に関する分析が行われている。また、米子の城下町の絵図を用いた研究も行われているが、米子の城下町の変遷やその構造を分析するにとどまり、城下町の空間構造の変化には着目されていない。この背景には、米子の城下町に関する詳細な絵図が江戸中期以降のものしか確認されていないことがある。しかし、藩政期の終わりから近代にかけての米子の城下町の空間構造の変化についてはまだ分析の余地があると考えられる。

そこで本稿では、江戸中期から大正期にかけての米子の城下町の変遷について GIS を用いて分析する。まず、米子の地理的特徴や米子城の概要を述べた後、GIS によって作成した年代別の地図から空間構造がどのように変化したのかを見ていく。また、GIS を用いた城下町地図では位置情報の付与により面積を求めることができるため、土地利用別の割合を算出し分析に利用する。

### II. 米子城の概要

#### 1) 伯耆国における米子城

現在の鳥取県西部に位置し、中海を挟んで島根県と隣接している米子市は、江戸時代初期から商業都市として発展し、「山陰の大阪」とも呼ばれていた。米子は交通拠点としての役割も大きく、JR 西日本の米子支社が置かれ、山陰本線・境線・伯備線が通っている。また、国道 9 号線・180 号線・181 号線・431 号線および山陰自動車道・米子自動車道が通り、南は岡山県・西は島根県・北は境港市と結ばれているほか、米子空港からは国内線のみならず、中国の香港や上海へ繋ぐ国際線も出ており、山陰観光の玄関口としての役割も果たしている。現在の国道や山陰自動車道は昔の街道を受け継ぐものが多く、米子には出雲国や因幡国などから主要な街道が通じていた（図 1）。参勤交代や出雲大社への参詣などに利用された出雲街道のほか、伯耆国南西部の日野郡へ続く日野往来や法勝寺往来なども米子へ繋がっていた。

また、米子は陸上交通だけでなく、水上交通においても要所である。米子港は、中海の内奥に位置し、気象の影響を受けることが少ない天然の良港である。米子港は、慶長年間(1596～1615)、米子城代家老横田内膳が港を町民に開放してから賑わいを見せた。池田光仲が鳥



図1 伯耆国の主要街道・主要港  
 (『藩史大事典 第六巻 中国・四国編』をもとに作成)

取藩主となってからは、米子港からの米輸送は米子城代家老荒尾氏によって行われるようになった。また、日野郡の鉄の積出港であり、西廻り航路、近国の船が多く寄港する主要港であった。

## 2) 米子城下町の歴史

米子城は、1467(応仁元)年に守護大名山名六郎宗幸によって国境警備のために飯山に砦が築かれたことがはじまりとされている。近世城郭としての米子城は、1591(天正19)年に東出雲・隠岐・西伯耆の領主となった吉川広家によって湊山に築城が開始された(表1)。吉川氏は当初、出雲国の月山富田城に入城したが、寒冷で不便であるとの理由から、既存の砦があり中海の近くに存在した米子に城を構えた。1600(慶長5)年に関ヶ原合戦が始まり、吉川広家は西軍として大阪に出陣したが、敗退し岩国へ転封となった。吉川氏の時代には、内堀、四重櫓、天守の石垣と土台は完成していたとされる。

1600(慶長5)年、駿府から18万石で中村一忠が移ってきた。一忠はわずか12歳であったため、家老の横田内膳が後見人として政務を担当し、城郭の整備や米子の町づくりを行った。中村氏の時代には、四層五階の天守、外堀が完成していた。また、吉川氏・中村氏は

表1 米子城関係年表

年代	出来事
1467 (応仁元年)	守護大名山名六郎宗幸が雲伯警備のために飯山に砦を築く
1591 (天正19)	吉川広家が湊山に本格的な城を構える
1600 (慶長5)	駿府 (静岡県) から18万石で中村一忠 (当時12歳) が移る
	家老横田内膳による築城・町づくり開始
1603 (慶長8)	内膳が一忠に誅殺される (米子城騒動)
1609 (慶長14)	一忠が二十歳で急死、中村家断絶
1610 (慶長15)	美濃国 (岐阜県) 黒野から加藤貞泰が6万石で移される
1615 (元和元年)	一国一城令 (因幡国に鳥取城、伯耆国に米子城が残される)
1617 (元和3)	加藤氏、伊予大洲 (愛媛) に転封
	岡山から32万石で池田光政が入国。米子城は家老池田由之に預けられる
	由之が江戸からの帰路で急死し、子の由成があとを継ぐ
1632 (寛永9)	池田光政の国替えで由成、岡山に移る
	池田光仲が鳥取藩主となり、家老荒尾成利が米子城を預かる
	その後、廃城まで荒尾氏が代々、城預かりとなる
1869 (明治2)	朝廷より米子城返上の命が出される
1871 (明治4)	廃藩置県
1880 (明治13)	米子城廃城
	天守閣は37円で売却、取り壊された
1912 (明治45)	山陰本線が開通 (境線は1902年、伯備線は1928年に開通)
1945 (昭和20)	鳥取大学医学部の前身、米子医学専門学校が設立
1953 (昭和28)	米子城三の丸跡に米子市営湊山球場が開場
1977 (昭和52)	米子城跡を米子市の文化財に指定
2006 (平成18)	国の史跡に指定

(『新修米子市史 第十四巻』、『伯耆米子城』より作成)

伯耆国内の城下町の住人を米子に集め、城下町づくりをした。

1609 (慶長14) 年に中村氏が急死したことにより、翌年、美濃国黒野より加藤貞泰が会見郡・汗入郡の領主として6万石で入国した。1615 (元和元年) 年に一国一城令が出され、因伯においては因幡国の鳥取城と伯耆国の米子城が残された。1617 (元和3) 年に加藤氏が伊予国大洲に転封となったのち、池田光政が岡山から因伯両国32万石の領主として入国した。米子城は家老である池田由之に預けられた。しかし、江戸からの帰路で由之が急死したため、由之の子由成が米子城主となった。

その後、1632 (寛永9) 年に国替えで池田光仲が因伯両国32万石の領主として入国した。光仲は鳥取藩主となり、米子城は家老の荒尾成利に預けられた。この時期に行われた荒尾氏による米子町の支配体制を「自分手政治」という。鳥取藩では、米子のほかにも、荒尾志摩

家の倉吉（倉吉市）、和田家の松崎（湯梨浜町）、津田家の八橋（琴浦町）で藩政初期から自分手政治が行われていた。家臣に町政を委任する自分手政治が藩政期を通じて行われていたことは、鳥取藩特有の政治体制である（中国地方総合研究センター、2014）。米子城の管理については、約五十名の鳥取藩士が「米子組」として任命、派遣され、明治維新に至るまで支配していた。

1869（明治2）年に朝廷より米子城返上の命があり、米子城は藩庁に引き渡された。武士の減少した武家地は田畑化し、その後旧武家屋敷地に官公庁が置かれた。さらに、1902（明治35）年の米子駅の開通後、駅周辺の市街地化が進んでいった。

### Ⅲ. 江戸中期から大正期にかけての米子の城下町の変化

#### 1) 米子の城下町絵図の GIS による分析

現在確認されている米子城下町図・米子城図は、いずれも 1632（寛永9）年の池田光仲鳥取入部以降のものである。本稿では、米子の城下町の藩政期から近代への移り変わりを分析するために、次の4つの絵図、地図を利用する。①1709（宝永6）年「伯耆国米子平図」（鳥取県立博物館所蔵）、②1769（明和6）年「米子御城下図」（鳥取県立博物館所蔵）、③1870（明治3）年「米子町全図」（米子市立図書館所蔵）、④1924（大正13）年「米子町全図」（米子市立山陰歴史館所蔵）。①「伯耆国米子平図」、③1870（明治3）年「米子町全図」は、米子の町全体が記載されているため、両図における土地利用を比較し、江戸中期から明治維新にかけての米子の城下町の空間構造の変容を見ていく。また、②「米子御城下図」は、城郭と内堀と外堀の間にある武家屋敷地区のみの記載であるため、武家屋敷地区の空間構造を示す際に用いる。④1924（大正13）年「米子町全図」では、米子城廃城後の市街地化しつつある米子城下町の様子を見ていく。

本稿では、ArcMap10.8を用い、それぞれの絵図の GIS 城下地図を作成した。また、ジオメトリ演算によって土地利用別の面積を求めた。なお、①「伯耆国米子平図」、②「米子御城下図」については現在の位置情報と大幅に異なっているため、縮尺・面積は示しておらず、土地利用ごとの構成比のみ算出している。

#### 2) 城下町米子の空間構造

ここではまず、米子の城下町の構造について見ていく。近世城下町の構成（町プラン）について、矢守一彦は武家地や町人地の配置の違いによって、総郭型、内町・外町型、郭内専士型、開放型の四つのタイプに分類した（矢守 1972）。米子の城下町は、この中の「内町・外町型」に当てはまる（國田 2006）。矢守によると、内町・外町型は、主要な商人の屋敷のみを侍屋敷とともに、外堀と内堀の間に配置し、主要でない町屋や新設の町屋は外堀の外に置かれている。さらに町屋の外側に下級武士や足軽の屋敷群、寺社群をもってカバーする。城の外郭としての侍町は堀で町人町と遮断されているのに対し、外町（町人町）は道幅が広く、小路もあり、船運や他国との街道と結ばれ、商業活動の便が図られているという特徴が

ある（矢守 1972）。

米子の城下町の内堀と外堀の間には、武家屋敷と一部の町人地（内町と片原（天神）町）があり、外堀の外側には町人地が広がっていた。城郭の南、外堀の外側に 30 人の鉄砲足軽が配置され、町人地の北側には寺が並んでいた。米子町は基本的に外堀によって武士と町人が区別されており、さらに、城下町と在（農村）は「称名寺なわて」と「町裏道」と呼ばれる道によって区別されていた。「称名寺なわて」は現在の外浜道路に平行して、岩倉町の涼善寺、本教寺の裏と現寺町の間を通る。ここまでが米子の町で、その外側にある寺町は米子の町には入っていない在である。また、「町裏道」は、博労町裏から大工町裏までの幅一間（約 1.8m）の道であると考えられる。内堀と外堀に囲まれた武士の居住区は「ちょう（丁）」と呼ばれ、鳥取から派遣された「米子組」をはじめとした武士が居住し、概ね 80 世帯ほどの家臣が住んでいたとされる。また、五十人の鉄砲足軽による五十人町（中町）も丁の中に配置されていた。外堀と「称名寺なわて」・「町裏道」の間は「まち」と呼ばれ、町人が住む町であった。米子は他の城下町に比べて武士が少なかったため、武士に頼る消費都市とはならなかった。米子では、武家屋敷地区の多くに空き地が生じたため、屋敷田が開拓された。

図 2 は 1769（明和 6）年の武家屋敷地区の復原図である。「米子御城下図」には、武家屋敷地に区画、人名、屋敷の規模が記されており、外堀の外側の情報は記載されていない。城郭が大きく描かれ、現在の地図と比較すると正確性は劣るが、土地利用区分が明確で、武家屋敷地区内の武家屋敷や町人屋敷を把握するには適している。表 2 は、武家屋敷地区における土地利用別の面積の割合を示したものである。ここでは、城郭地区を除いた面積を計算している。表 2 から、武家屋敷が 6 割を占めていることが分かり、田地は 3 割を占めていることが読み取れる。北側に一部町人屋敷と寺院が見られるが、面積はそれぞれ 3.0%、8.2%に過ぎなかった。面積は計測していないものの、武家屋敷には廃宅もみられる。したがって、武家屋敷地区での田地や廃宅の存在は、武家屋敷が空洞化していたことを示すと考えられる。

米子城の北側に寺院に位置するが、ここには清洞寺があったと考えられる。これは、もともと亀島と呼ばれる小島であったが、今は埋め立てられて、岩と松が残っている。米子城主加藤貞泰が父光泰の菩薩を弔うために、亀島に五輪塔を作った。その後、米子城主となった池田由之が、父母の供養のため海禅寺を建立し、二基の五輪塔を建てた。海禅寺はその後禅源寺と改められ、1710（宝永 7）年に博労町に移され、了春寺となった。亀島にはその後、米子城主荒尾氏の家臣村河氏が、江尾から清洞寺を移して菩薩寺としたため、この島は清洞寺岩と呼ばれるようになった。

### 3) 年代別に見る米子の城下町の空間変化

図 3 は 1709（宝永 6）年の米子の城下町の復原図である。吉川氏、中村氏の時代に整備されたと言われる米子城下町は、内堀と外堀によって武士と町人の居住地（内町、片原町を除く）が明確に分かれていた。武家屋敷地区の外側には、L 字型の外堀があり、外堀の外側

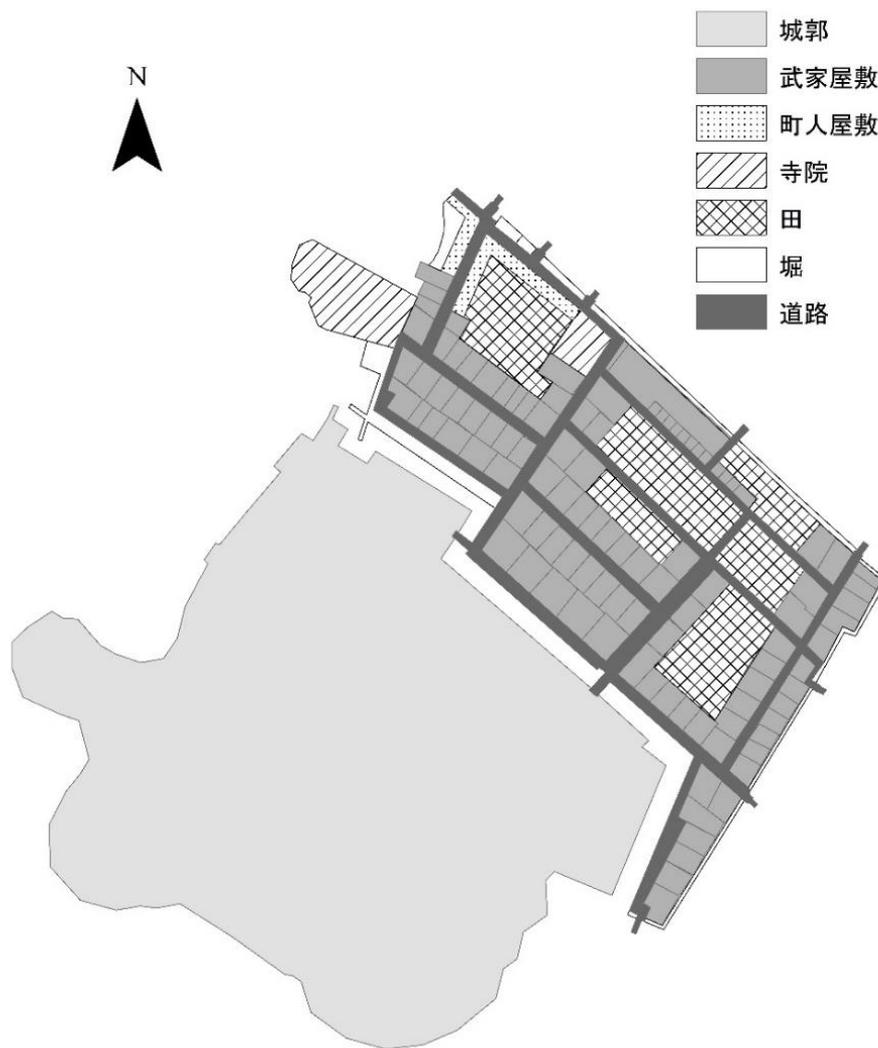


図2 1769（明和6）年の武家屋敷地  
 （鳥取県立博物館蔵『米子御城下図』より作成）  
 注）図2の武家屋敷には廃宅も含む。

表2 『米子御城下図』における土地利用別割合（城郭地区を除く）

武家屋敷	町人屋敷	寺院	田
59.0%	3.0%	8.0%	30.0%

（図2よりジオメトリ演算を用いて算出）

には町人町が広がっていた。なお、後年の地図と比較すると、武家地に比べ、町人地は実際の面積より小さく描かれていると考えられる。

また、米子の城下町の特徴として、城下町の北側の現在の内町と天神町に当たる場所のみ、外堀の内側に町人屋敷が存在している。ここには、廻船問屋の後藤家をはじめ、海運関係の人が多く住んでいた。後藤家は天文年間（1532～1555年）に石州浜田から移住してきたと伝えられており、米子城築城以前から米子は港町として栄えていたと考えられる。

さらに、米子城下町のもう一つの特徴として、米子に居住した武士は一般の城下町に比べて少なく、武家屋敷地区にも田が存在していたことが挙げられる。表3から、武家屋敷の割合が44%に対して田が12%もあることが注目される。これは米子では武家屋敷地区が空洞化していたことを示すと考えられる。このことは、米子城が鳥取藩の支城であったことが関係している。鳥取藩主であった池田光仲は本城である鳥取城に入ったため、米子城は家老の荒尾成利が預かることになった。藩から派遣された米子組といわれた家臣や荒尾氏の家来が武家屋敷に住んでいたが、それでも本城に比べると武士の数が少なかったと考えられる。

図4は1870（明治3）年の米子の城下町の復原図である。この地図はそれ以前の絵図と比べるとかなり正確であり、現在の地形ともほぼ一致する。図3と比較すると、武家屋敷は減少しており、官公庁や田に置き換わっていることが分かる。官公庁としては、兵制司があり、現在の鳥取大学医学部の敷地に置かれていた。兵制司は、鳥取藩により1868（明治元）年、軍務を統括する庁として設置された。また、教育の場として総学局も設置された。総学局は武士や有力町人の子弟に皇学・漢学・武学・医学を教える学校であった。

また、田地も減少しており、図3に比べて武家屋敷地区には小規模な田が点在している。表4からも武家屋敷面積の割合が19.1%、田地面積の割合が5.0%とともに減少していることが分かる。その一方で、土地利用の不明の場所が増加しており、これは空き地と考えられる。1869（明治2）年に朝廷より米子城返上の命があったことにより、武家屋敷や田が減少したのではないかと考える。これにより、米子城は藩庁に引き渡され米子の武士は減少、それに伴い田を管理する人がなくなったため、田も減少したと考えられる。

一方、町人地は図3と比較すると44.8%と増加しており、加茂川の外側から「称名寺なわて」にかけて広がっているのが分かる。地図の欄外には人口9258人、うち独礼家内（武士待遇）82人、商人4836人、職人1950人、農民1845人と記されており、商人、職人が大半を占めている。このことから、米子では町人地が発達していたことが分かる。

図5は1924（大正13）年の旧武家屋敷地と町人地を中心とした復原図である。米子城廃城の後、城下町は武家屋敷地に官公庁が入り、学校や病院などその他の建物が増加した。図5からは内堀が埋め立てられ、その多くが田地となっていることが分かる。内堀は1892（明治25）年頃から明治の終わり頃に埋め立てられたとされている。また、外堀も一部流路が狭められていることが見て取れる。現地調査した際に、内堀跡は「内堀通り」として道路になっていることが確認できた。

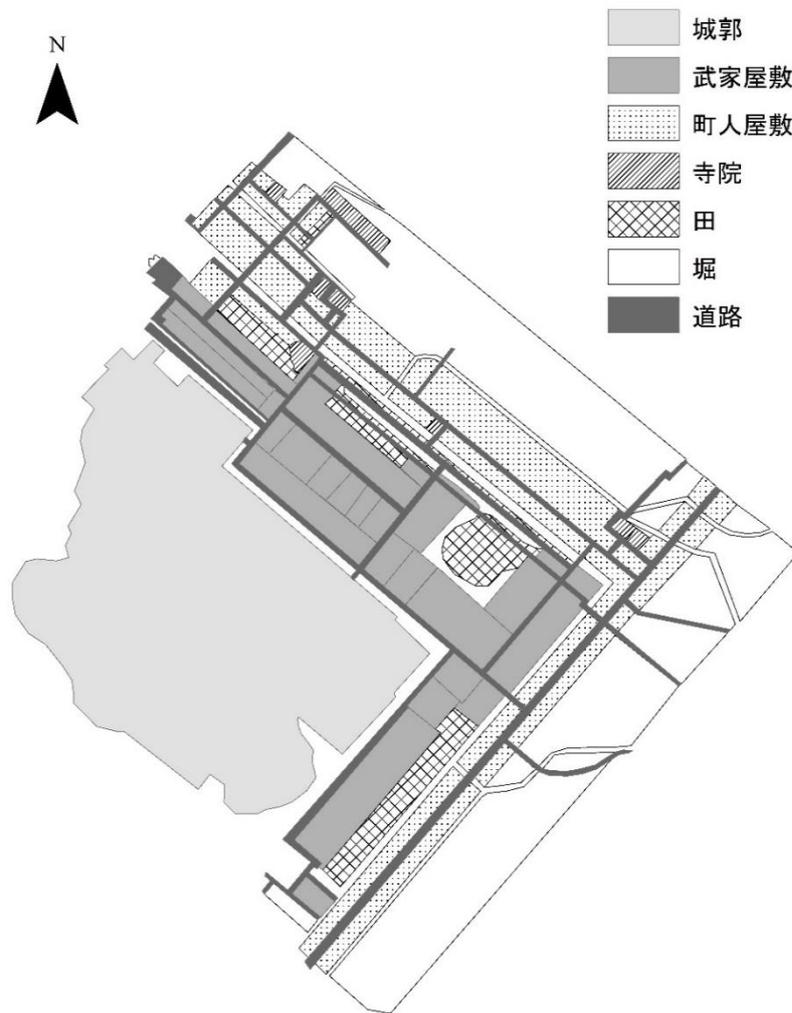


図3 1709（宝永6）年の城下町

（鳥取県立博物館蔵『伯耆国米子平図』より作成）

注）堀以外の空白の部分は土地利用が明確でないため分類していない。

表3 『伯耆国米子平図』における土地利用別割合（城郭地区を除く）

武家屋敷	町人屋敷	寺院	田
44.1%	41.1%	2.6%	12.2%

（図3よりジオメトリ演算を用いて算出）

注）土地利用が不明なところは計算しなかった。

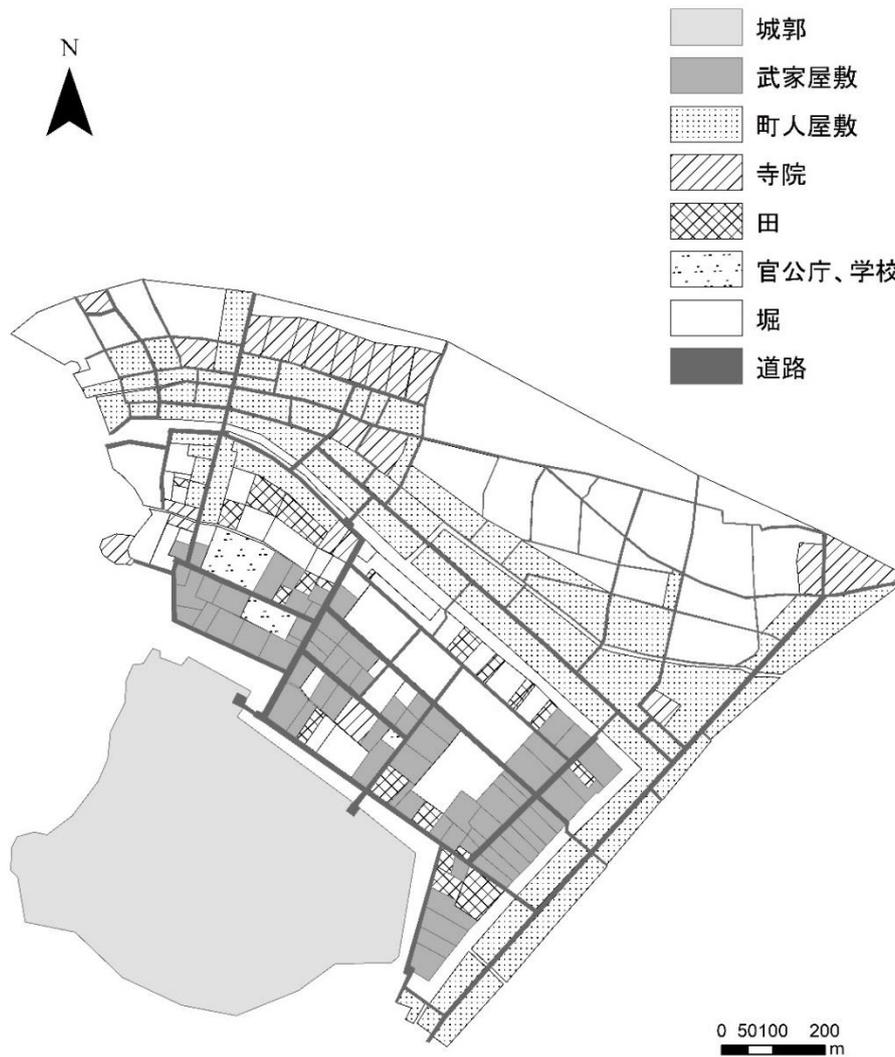


図4 1870（明治3）年の城下町

（米子市立図書館蔵『明治3年 米子町全図』より作成）

注）堀以外の空白の部分は土地利用が明確でないため分類していない。

表4 『明治3年 米子町全図』における土地利用別割合（城郭地区を除く）

武家屋敷	町人屋敷	寺院	田	官公庁等
19.1%	44.8%	10.8%	5.0%	2.2%
139372㎡	326380㎡	78995㎡	37051㎡	16629㎡

（図4よりジオメトリ演算を用いて算出）

注）総面積：727423㎡

武家屋敷、町人屋敷、寺院、田、官公庁等以外の18.1%は、図4の空白部分であり、空き地や明確な分類ができない部分である。

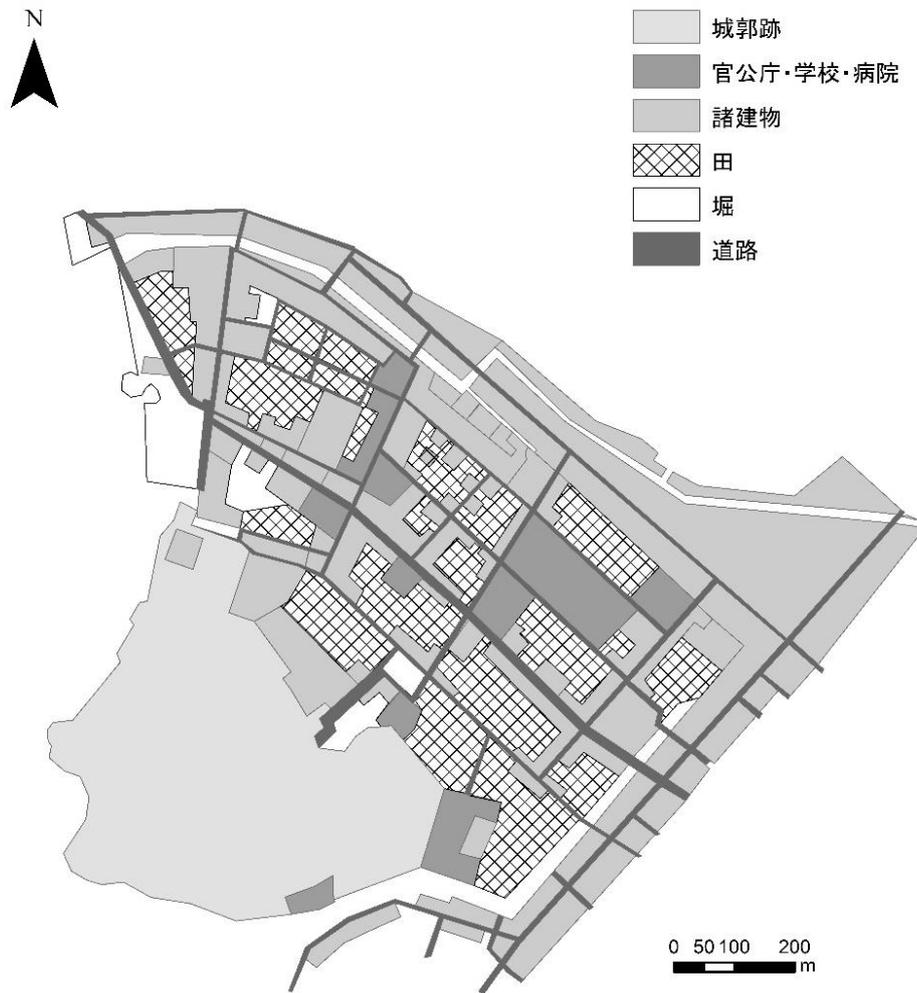


図5 1924（大正13）年の旧武家屋敷地と周辺  
 （米子市立山陰歴史館蔵『大正13年 米子町全図』より作成）

表5 『大正13年 米子町全図』における土地利用別割合（城郭跡を除く）

官公庁	諸建物	田
10.0%	62.0%	28.0%
69582㎡	423173㎡	189938㎡

（図5よりジオメトリ演算を用いて算出）

注）総面積：682693㎡

表5から、武士の減少とともに一時減少していた旧武家屋敷地の田は、この頃には再び増加し、3割近くを占めていることが分かる。内堀が田地になったことに加え、増加した空き地を田として利用したことが要因と考えられる。建物は田の中に点在し、モザイク状になっている。学校や官公庁は武家屋敷を再利用したものや取り壊して新たに建てられたものもある。旧武家屋敷地には、明道尋常小学校や義方尋常小学校、博愛病院などが見られる。

図3、4と比較すると、藩政の終了とともに武家屋敷が減少し、徐々に空間構造が変化してきたことが分かる。武家屋敷地区の跡は現在大学や商業施設、その他建物が立ち並び市街地化しているため、ほとんど田地は見られないが、大正期にはまだ田地の占める割合が多く、市街地化が進んでいなかったことが分かった。

#### IV. おわりに

本稿では、米子の城下町の歴史的背景を踏まえた上で、絵図のGIS分析を通して城下町の空間構造の変化を見てきた。分析を通して明らかになったことを以下にまとめる。

まず、米子の城下町は、主要な商人の屋敷のみを武家屋敷とともに、外堀と内堀の間に配置し、その他の町人屋敷は外堀の外に置く内町・外町型の空間構造を形成している。また、町人屋敷の外側には寺町や在（農村）が広がっている。

次に、江戸中期から大正期のGIS城下地図を作成し、分析したことで空間構造及びその変化を見ることができた。一つに、1769（明和6）年のGIS城下地図からは外堀内の武家屋敷が約6割、田地の面積が約3割を占めていることが明らかになった。このことから、米子城下町はほかの城下町に比べて武士が少なく、武家屋敷の割合が低いと考えられる。1709（宝永6）年と1870（明治3）年のGIS城下地図を比較すると、後者では武家屋敷が減少し、官公庁や学校が設置されていることが確認できた。また、武家屋敷地区内の田も減少しており、これは、米子城が藩庁に引き渡されたことによる武士の減少が要因であると考えられる。さらに、1924（大正13）年のGIS城下地図では、藩政時代から近代への移り変わりを見ることができた。武家屋敷のあった場所には、官公庁や学校、病院等が入り、田地の中に建物が点在している。この頃も、まだ田の占める割合が多いことから、市街地化が進んでいなかったことが明らかになった。

米子城下町をGIS地図化したことによって、特に武家屋敷地区の変遷、田の存在や武家屋敷の減少といった土地利用が大きく変化していることを、地図や数値で具体的に示すことができた。今回の分析で用いた絵図は池田光仲が鳥取藩主となった後のものであるため、鳥取藩の支城としての米子城とその城下町の空間構造について見てきた。武家屋敷が空洞化し、田地の占める割合が多い武家屋敷地区に比べて、町人地区では商工業が発達し、町人地が拡大していったことが米子の城下町の特徴である。絵図をGISデータ化することで、土地利用を空間的に把握することができ、空間構造の変化を読み取ることができた。

—付記—

本稿を作成するにあたり、米子市立山陰歴史館館長の國田俊雄様、米子市役所文化振興課の中原斉様にはお忙しい中大変お世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

—参考文献—

- ・米子市史編さん協議会、2004、『新修米子市史 第十二巻 資料編 絵図・地図』、米子市
- ・米子市史編さん協議会、2009、『新修米子市史 第十四巻 資料編 絵図補遺』、米子市
- ・中井均、2018、『山陰名城叢書1 伯耆米子城』、ハーベスト出版
- ・木村礎・藤野保・村上直、1990、『藩史大事典 第6巻 中国・四国編』、雄山閣
- ・米子市立山陰歴史館編、2018、『米子城資料第4集 米子城絵図面』、米子市立山陰歴史館
- ・国田俊雄、2006、「米子城築城と城下町米子の町プラン」、『伯耆文化研究』、第8号、1-19。
- ・佐々木謙、1971、『伯耆米子城』、稲葉書房
- ・中国地方総合研究センター編、2014、『中国地域の藩と人—地域を支えた人びと—』、中国地方総合研究センター、73-77。
- ・矢守一彦、1972、『城下町』、学生社
- ・米子市教育委員会編、2006、『新しい米子の歴史』、米子市教育委員会、54-55。
- ・米子市立山陰歴史館運営委員会、1998、『米子のふるさと散歩』、米子錦ライオンズクラブ
- ・鳥取県公式サイト/とりネット/米子港（最終閲覧日 2021/12/26）  
<https://www.pref.tottori.lg.jp/29996.htm>
- ・米子市ホームページ/国史跡 米子城跡（最終閲覧日 2021/12/26）  
<https://www.city.yonago.lg.jp/4439.htm>